

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

|            |   |
|------------|---|
| Title      | 讀人形之家有感：評論  |
| Author(s)  | 一松，美利   |
| Citation   | 龍南會雜誌， 1 5 2： 4 2 - 4 5   |
| Issue date | 1913-11-05  |
| Type       | Departmental Bulletin Paper   |
| URL        | <a href="http://hdl.handle.net/2298/6283">http://hdl.handle.net/2298/6283</a> |
| Right      |   |

## 讀人形之家有感

弧松庵主人

國家多事！外に對米對支の二大問題、内に新思潮問題、婦人問題（新しき女を如何にすべきか？）實に吾國は此の四つの大なる絆から通るゝ事が出來ず常に國民の頭腦は惱まされつゝあるのである。

さり乍ら前の二問は、其の局に當る爲政者に依つて解決せらるべきもので、後の二問は眞に吾等思想界に生きる者が解決すべきものである。

何と言つてもイブセンの人形の家のノラは婦人問題の焦点となつてゐるのは事實である、（故郷のマグダと共に）。新しき女の問題は單に女性にのみ放任すべきものでなくて、吾等男性の一日も之を忽諾に附する事を許さぬので、私は先づイブセンの人形の家を（無論ドイツ文にて）讀んで見た。初め一度讀んだ時は何が何だかチンブンカンで解らなく、イブセンが何故にこんな脚本を書いたのか？何故にノラは三人の惆悵しい子と最愛の夫とを捨てて、しかもクリスマスの其小夜中に家出を決行したのか？一度家を出たノラは永久に歸らぬか？先づこの三問に就いて私は其の解釋に少からず苦んだ。

元よりこの脚本は一八七九年彼が五十一才の歳公にして、天下の耳目を聳動し一躍彼をしてシエクスピア以後の大詩人！大劇的天才！たらしめた程故、私如き劇其物が何が何やら夫さへ解せぬ者が批評するなどは放埒にも程のある事と思はれて、眞に耻しい次第である。

當年此の劇がノールウェールで初めて公演せられた時、攻撃の聲は喧しく、人間の道德心を腐敗せしむる

呪ふべきものであるとせられ、スコットランドでも同じ槍玉に擧げられたさうであるが、米國では英國と異り保守主義でない處から、紐育で相當の歡迎を博したさうだが、我國で先年文藝協會が該劇を演じた時等は芝居や小説を一種の道德修身の手段と思つてゐる人は、矢鱈に攻撃の刃を向けて、恐るべき婦人問題の提供であると迄罵つた。然しノラは最も極端なる自覺を持つた女ではあるが、彼の青鞥社の平塚明子の如き突飛なる行爲に出づるものではなく、又彼等吾國の所謂新しき女が叫ぶが如く「結婚は女子の男子に對する絶對的屈從なる故に吾等は之を避く」などの言行を爲すものでなく、彼女は單に父の家において、小さき人形として取扱はれ「かくあるべし」「かくあれかし」と強ひられ、ヘルマーに嫁いで家庭の人となつてからと言ふものは、大なる人形として夫に弄ばれ、自分の主義主張としては更になく、唯床の間の置物の如く、夫の物とされた迄はよかつたが、此の人形化せられたノラは一朝クローグシユタットに對する借金問題の行き違ひよりして、自分の無能無知を覺醒し、到底今迄の人形では男性の女性に要求する重荷―子女の教育を委せらるゝに堪へ得ず、先づ子女の教育よりは自己自身の教育(人形としてでない)が焦眉の急であるとして、家出したのに過ぎないので、決して法外な遣り方では無い。然しかゝる女性の家庭にありては自己の教育が不可能で、家を出れば可能であるかと言ふ事も、亦疑問とする處である。

我國の女性の如きは、關關以來「己の主義主張を枉げて迄も、單に良妻たれ！賢母たれ！」と強ひられた長い因習の爲めに、現今(と言つては失禮千万だが)先づ引込思案な人形的な、到底新時代の新要求を満足し得る事の出來ぬ(新しき眼光にて見れば)異様なものと成り果て、そろ／＼長夜の夢から醒めて後れ走せに新しき運動を開始しつゝあるので、かくも婦人問題が火の手を擧ぐるに至つたのは必然の結果である。故に

吾等は此の防ぐ事の出来ぬ新運動に對しては之を撲滅せんとするよりは、寧ろ之を善用して女性をして堅實に發展向上せしむるに如かざるを悟らねばならぬ。惟ふにイブセンは此處の呼吸を良く辨へて、之が諷刺覺醒を叫ぶ爲に此の劇を書いたのであらう。

最後に、ノラは再び歸り來るかに就いて……最も、之は私には六ヶ敷い問題ではあるが、前後八年間住み馴れて三子迄も擧げ一朝籠を出て自由の身となつた鳥は、果して長い長い八年間の過去に對して少しの憧憬も持たずに歸りて來ぬか？吾國に於けるよりも父子關係は幾分か薄いと言はれる西洋でも、それはあまりに酷い斷案ではあるまいか？必ずや元の時を戀しがりて、歸り來る時のあるを信じ得るのである。さて又其の時ヘルマーはノラを喜んで迎へるか？如何かは此の際問題では無いが、かくもノラを戀してゐる彼——所謂鼻毛の長い彼——は以前と變らぬ熱き血汐を以て彼女を迎へるのも亦自ら明な事である。尤もイブセンは此の砌如何な氣分を以つて書かれたかは悲しい哉私に取つては皆目解らぬが、原本は

ノラ「妾達の共同生活が結婚となる事です、左様なら（ノラ廊下より出て行く）」

とあるさりで終を告げてゐる。之がイブセン一流の書き方なそうで、何が善だやら、何が悪だやら、此の先如何なるのやら、——皆讀者の批評に委してある、殊に此の三幕物の悲劇が、僅クリスマス一夜の出來事であると言つたら、在來の二十乃至三十年も續ける事を書ける奇悲劇を見た眼には、合點の行かぬ程自然的に映じ、且つ台辭も普通の對話的で少しの不自然的な所としては更に無い、茲が眞に彼をして新しき（シエクスピア以後の）新しき、現今歐洲文壇にての意にあらす（劇作家として崇拜せしむる所以なのである）と言はれてゐる。刺へ此の劇はヘルマーの宅の一間にて演せらるるのだから猶更面白い感がある。

私は茲に慨嘆に堪へぬのは吾國劇壇の現状で、世界的傑作とでも言はれるものとは薬にし度い程も無い憐な有様で、皆「團栗の脊比べ」燈火螢火の如き作家の群衆——何れの時か油盡き秋が來て其の微光をだに失ふの時があると思ふと殆んど泣き出し度い程である、孟子の言つた様に「聖人君子は二三百歳にして一人世に出づる」とすれば、近松死して悠悠二百有余歳、もう一人位の天才が出ていく頃なのである。

到底ヘンリック、イブセンやゲルハルト、ハウトマンやモウリス、メエターリンク等に比すべき大天才は現今望むべきでない。尤もホフマンシユタールやメエターリンクに見る様な、象徴主義神秘主義を標榜せる二三の劇作はあるとしても、同日に語り得べきものとは無い。而して過渡時代にある吾國の劇界を如何にして、一等國の夫として耻ぢぬ様にすべきかに考へ及んでは、徒に煩悶して、イブセン山ハウプトマン山メーターリンク山の彌が上にも高くて、吾等の攀ぢ得ない事を痛切に感じると共に、新たな冒險的な、青年に有り勝ない一種の瘦我慢よりして、緊禪一番此の險に對して、再舉を試み度く欲して止まぬ様な氣になつた。

終りに、私は單に三回讀んだと言ふ丈なので、批評とか批判とか言ふ様な事は絶對に出來ないのだが、始めて讀んであまりに面白く感じたので不遜をも顧ず、下らぬ事をぐどく書いて、地下にある不朽の大天才に對し大に耻ぢ入ると共に、神聖なる本誌を瀆し、合せて親愛なる諸兄の眼を損ひし罪を擱筆するに當り深く厚く詫び申す次第である。(完)